

## 李白における「捉月」説話

——終焉説話の傳記論的意味——

松 浦 友 久

(一) 序

(二) 「捉月」説話の文獻的再確認

(三) 「捉月」説話の構造と機能

(四) 生誕説話・作風説話・終焉説話の系統的對應

(五) 杜甫・李賀における終焉説話

(六) 結語

## (一) 序

李白はその晩年、長江の采石磯で酒に酔い、水中の月を捉とろうとして溺死した。——この印象的な説話\*は、李白の詩風や人柄を象徴するものとして、廣く世に傳えられてきた。一般に中國の詩人のなかで、李白は説話や傳説が最も多い一人と言ふことができようが、「捉月」説話は、いわば詩人の一

生を締めくくる最終場面として形成されているだけに、傳記論的にも獨特の意味をもつものと言つてよい。

\* 「説話」の定義は一定していないが、本稿では、各種の「傳承譚」を廣義の「説話」とし、その中で特に非現實性の強いものについては「奇談・傳説・幻想譚・空想譚……」のように、逆に、現實性の強いものについては「實話・學説……」のように、それぞれ下位的に區分して使用する。

本稿では、この「捉月」説話の形成と繼承が、李白の詩と人生に關する傳記論として、どのような意味をもち、かつ、どのように位置づけられるべきか——という主要な論點について考えたい。併せて、杜甫や李賀の終焉説話と比較した場合の相互的な異同についても、一連の問題として見てゆきたい。相異なる主要な終焉説話との比較において、「捉月」

説話の文學史的 성격も、いっそう明確なものになると考えられるからである。

## (二) 「捉月」説話の文獻的再確認

捉月説話に關しては、現行の關係著作では、五代の王定保『唐撫言』を初出文獻だと述べるものが、大多數を占めていゝる。しかしこれは、清の王琦が「李太白年譜」(王注本、卷三十五)の寶應元年(七六二)の條で、

『撫言』曰、李白着宮錦袍、遊采石江中、傲然自得、  
旁若無人、因醉入水中、捉月而死。

と記しているものを、原典未確認のまま再引した結果であり、少なくとも現行の『唐撫言』の諸本には、この記述は見られない。或いは、乾隆年間(3)に王琦が用いたテキストにはこの一條が有った可能性もあるが、その可能性を論じるためにも、それが王注本からの再引であることを明示すべきであろう。(4)

従つて、現存の確實な資料で最も早いものとしては、同じく王注にも引用される北宋の梅堯臣(一〇〇二～一〇六〇)の

詩ということになる。

採石月贈郭功甫

採石の月 郭功甫に贈る

採石月下聞謫僊	採石の月下に謫僊を聞く
夜披錦袍坐釣船	夜 錦袍を披 <small>き</small> て 釣船に坐すと
醉中愛月江底懸	醉中には月の江底に懸 <small>か</small> るを愛し
以手弄月身飄然	手を以つて月を弄 <small>も</small> れば身は飄然たり
不應暴落飢蛟涎	應 <small>まさ</small> に飢蛟の涎 <small>よだれ</small> に暴落すべからざれば
便當騎魚上青天	便 <small>まさ</small> に當に魚に騎りて青天に上るべし
青山有塚人謾傳	青山に塚有るに 人 謾 <small>みだ</small> りに傳ふ
却來人間知幾年	却 <small>かえ</small> つて人間 <small>ひと</small> に來たりて幾年なるを知らん

(四部叢刊本『宛陵先生集』卷四十三)

毎句韻の七言古詩。省略部の六句は、郭功甫(祥正)の現況に即して詠われており、「王・忘……羊」の毎句韻に換っている\*。

\* 文字にはやや異同があり、南宋の胡仔『荅溪漁隱叢話・前集』

(卷三十七「郭功甫」)では、「採石」が「采石」であるほか、第一句の「聞」は「訪」<sup>(5)</sup>に作る。清の厲鶚『宋詩紀事』(卷二十「梅堯臣」)では、さらに詩題の「月」の下に「下」があり、「贈」の下には「郭」がなく、第六句の「魚」は「鯨」に作る。王琦年譜では冒頭の六句のみを引くが、基本的には「宋詩紀事」と同じであり、ただ、第一句の「聞」は「逢」に作っている。第一句は、情況的には「訪」や「逢」のほうが分りやすいが、「評判や噂を聞く」という情況なら「聞」でも通じよう。第六句は、關連の傳承(後述)から見て「騎鯨」が本来の形であろう。『荅溪漁隱叢話』でも、廖德明校點本(人民文學出版社、一九八一年版)では、徐鈔本・明鈔本によって「鯨」に改めている。

また、當の郭功甫自身にも同様の作品が傳えられている。

騎鯨捉月去不返　鯨に騎り月を捉り　去りて返らず  
空餘綠草翰林墳　空しく綠草を餘す　翰林の墳

(「采石渡」<sup>(6)</sup>、七言古詩二十句中の第十一・二句)

郭功甫(『宋史』卷四四四の本傳では「甫」を「父」に作る)は、采石磯のある當塗の人。後年、李白の墓のある青山に隱居し、『青山集』なる著作をもつ<sup>(7)</sup>。また、その母が李白を夢に

見て生んだと傳えられ、梅堯臣のこの詩によって李白の後身とも稱せられた人物である。それだけに、捉月説話の早期の傳承者であるのに相應しい。

この兩者の作品で特に注目されるのは、采石磯・飲酒・江湖・溺死という一連の要素に基づきつつ、李白の終焉に關する「捉月」説話が、いわば完成形態として表現されている點である。空想・奇聞のレベルに屬する「騎鯨」<sup>(10)</sup>の要素も加えれば、當該傳承譚としては、これにさらに付加される要素はまったく存在しないと云ってよい。

\* 一般に説話や傳説は、讀者や聽衆の期待や要請によって次第に形成されるという性格を帯びているが、その期待・要請にほぼ完全に應え得た段階で、以後、基本的には變化を示さなくなることが多い。これを、當該説話の完成形態と見なしておく<sup>(11)</sup>。

北宋前期の梅堯臣たちに續いて、中期の趙令時(德麟)の『侯鯖錄』(卷六、稗海本)には、

世傳、太白過采石、酒狂捉月。竊意、當時堯殯於此、至范侍郎(傳正)、爲遷窆青山焉。

と記す。ここでは、「捉月溺死」が傳記的な事實・實話とし

て論じられている點が、注目されよう。

これに續く、より詳細な記述としては、南宋前期の洪邁（一一一三—一二〇三）の『容齋隨筆』（卷三）が擧げられる。

世俗多言、「李太白在當塗采石、因醉、泛舟於江、見月影、俯而取之、遂溺死。故其地有捉月臺」。

子按、李陽冰作太白草堂集序云、「陽冰試弦歌於當塗、公疾亟、草藁萬卷、手集未修、枕上授簡、俾爲序」。又

李華作太白墓誌、亦云、「賦臨終歌而卒」。

乃知俗傳良不足信。蓋與謂杜子美因食白酒牛炙而死者同也。

洪邁は博學と考證をもつて知られるが、この冒頭で「世俗多言」と言っているように、この段階で捉月説話は、世間周知の話題として扱われている。ここで注意されるのは、梅堯臣・郭功甫の詩や『侯鯖錄』の記述と比べて、説話としての形態は同様でありながら、それが、杜甫の牛肉白酒の説話と同じく、否定すべき俗説として論じられている點であろう。

「捉月」説話を俗説とするこの態度は、王琦自身の按語、および所引の『千一錄』においては、——やや論證の重點を

李白における「捉月」説話（松浦）

移しつつ——さらにははっきりと表出されている。王琦はまず、『舊唐書』『新唐書』の本傳や李陽冰「草堂集序」に「捉月」説話が全く見られないことから、次のような判断を下す。

豈古不弔溺、故史氏爲白諱耶。抑小説多妄、而詩人好奇、姑假以發新意耶。

すなわち、「古い時代には溺死者を不吉として弔わない習慣があったため、史家が李白のために溺死を諱んで書かなかつたのだろうか、或いは、小説類には妄が多く、詩人は奇を好むものだから、捉月を話題として新意を發しようとしたのだろうか」と言うのである。そして更に、『千一錄』の記載として次のように注記する。

杜子美之沒、旅殯岳陽、四十餘年、乃克襄事於首陽。元微之之「誌」詳矣。李太白卒於當塗、以集託族叔邑令陽冰。陽冰之「序」明矣。而稗家之說、乃云皆以溺死。二公生同聲、而沒亦同毀。豈相嫉者流言、而志奇者不察耶。

ここでは、李白と杜甫の湯死説が、「生きては聲を同じくし、死しては毀を同じくするもの」として捉えられ、その原因については、「二人の才能を嫉む者が流言したのを、奇談を志す者が氣づかなかつたのではないか」と推測している。

ここに一貫するものは、「溺死」を不祥の死ととらえ、——善意からであれ（爲白諱）、惡意からであれ（相嫉者流言）——それを明記することは大詩人の終焉にとってマイナスのイメージを生む、という判断であろう。

こうした判断は、中國知識人の或る種の死生觀に關わるものとして根強い繼承性をもっており、近年の論著においても、時として再論されている。しかし、少なくとも詩人としての李白の終焉に關しては、その「捉月溺死」の説話がマイナスのイメージとして論じられるのは適切でない。次章では、その點を中心にやや詳しく考えたい。

### (三) 「捉月」説話の構造と機能

現存の確實な史料から判断すれば、李白の終焉に關する捉月説話は、——上記のごとく——晩くとも北宋前期（梅堯臣には成立していたと見られよう。またもし、王琦所引の『撫言』が、たんなる誤引ではなく何らかの確かな史料に據って

いたとすれば、その成立はさらに五代までは遡ることになる。しかし、いずれにしても、現存の唐代の關連史料に記述が見られないことから言えば、李白の没後、恐らくは百年以上を経て形成されたもの、と見ておくのが穩當であろう。少なくとも、李白の没後ただちに喧傳されたものでないことは、ほぼ確認してよいと思われる。なぜなら、もし假りに、去世直後からの世間周知の話題だったとすれば、李白の詩と生涯の顯彰を目的とする李陽冰「序」、范傳正「碑」等において、少なくとも「一説」「或説」「俗説」として言及されているのが自然だからである。捉月説話を肯定する立場なら無論のこと、逆に否定する立場にしても、世間周知の俗説を否定するために、否定のための言及が不可缺となるであろう。

この事實は、「捉月」説話というものが、實は、李白の「詩と生涯」を或程度まで客觀化・相對化して把握するだけの時間が経過してこそ始めて形成されやすい、そういう性格をもつものであることを意味しているだろう。それは要するに、享受史的・文學史的な相對化によって、當該詩人への認識が、「より特色的な要素の集約」という形で行なわれやすくなるからだ、と言つてよい。

「捉月」説話が、如何に李白という詩人の特色的要素を重

點的に集約したものであるかは、この傳承譚を、いわば「説話の構造」という視點から分析することによって、容易に理解されよう。<sup>(15)</sup>

李白自身の主觀においてはともかく、通史的・客觀的に見る限り、李白の詩歌の主要題材は、「羈旅」であり、「飲酒」であり、「月光」である。それは、もし假りに李白の詩中からこの三種の題材を除いた場合のことを考えれば、疑問の餘地なくはつきりするであろう。つまり、李白詩の李白詩的特色——感覺・詩想・イメージ等——が決定的に變化してしまふのであり、その意味で、文字通り不可缺の存在となつていくわけである\*。

\* この點、たとえば杜甫における「飲酒」は、量的には二百七十餘首という多數の作例をもつにも関わらず、質的には、李白におけるような決定的な不可缺性をもっていない。主要作品とされるものに酒への言及が乏しいことはすでに指摘されている<sup>(17)</sup>が、何よりも、假りに杜甫の作品から「飲酒」の題材を除いた場合でも、杜詩の杜詩的特色が決定的に變化することはないからである。もし、杜詩における不可缺の主要題材を求めるとすれば、恐らくは「望郷」「貧窮」「憂國」等がそれに當るであろう。

この點から「捉月」説話の構成要素を考えた場合、そこには、①旅寓地としての「采石磯」において、②心のままに「飲酒」を樂しみ、③興に乗じて「江月」を捉る——というように、李白詩の主要題材が有機的かつ重點的に集約されていることが確認されよう。この説話が、後世の詩人や讀者にとつて、李白の詩と人生を象徴するものと感じられるのは、何よりもまずこの點に因つてゐる。

そればかりではない。終焉説話としての「旅寓—飲酒—捉月—水死」の傳承は、李白の詩と人生の基本を貫く一連の性格、すなわち、超俗性・天才性・客寓性といった抽象的な基調觀念を、人生の最終場面において具象的に可視化する、という機能をもつてゐる。

\* これはむしろ、李白の實際の人生や個々の作品に、世俗的・凡人的・非客寓的な事跡や態度が見られることと、互いに矛盾するものではない。そうした相反的な要素を多分に含みながらも、李白の作品と人生の總體が、他の詩人たちのそれに比べて、際立った超俗性・天才性・客寓性を感じさせるといふ事實——ないしは詩的眞實——こそが、詩人の作品論・傳記論として最も重要なポイントだからである。

以上を重點的にまとめるとすれば、「捉月」説話が李白の

詩と人生の象徴として鮮明な印象を生むのは、——羈旅・飲酒・月光といった主要題材の集約化という直接的な原因のみにとどまらず、——さらにこの説話が、「李白の詩人像」を構成する一連の基調、觀念を、人生の最終場面において可視化・イメージ化しているからだ、と判断されよう。

#### (四) 生誕説話・作風説話・終焉説話の系統的對應

このように見てくると、われわれは、一つの興味深い問題に氣づかざるをえない。すなわち、終焉説話としての「捉月・水死」の傳承は、實は、同様に李白の超俗性・天才性・客寓性を象徴する二つの傳承、——生誕説話としての「太白星」傳承、および、作風説話としての「謫仙人」傳承と、系統的に對應しているのではないか、という問題である。

李白の母が太白星（金星・長庚星）を夢に見て李白を懷妊した、という生誕説話は、すでに李陽冰の「草堂集序」（七六二年）や范傳正の「新墓碑」（八一七年）に見えている。

神龍之始、逃歸於蜀。復指李樹而生伯陽。驚姜（懷妊）之夕、長庚入夢。故生而名白、以太白字之。世稱太白之

精、得之矣。

（「草堂集序」）

公之生也、先府君指天枝以復姓。先夫人夢長庚而告祥。名之與字、感所取象。

（「新墓碑」）

正確な事實關係という點で言えば、李白が懷妊もしくは誕生した時點で、その胎兒・嬰兒が、將來、中國を代表する詩人に成長するということが、周囲の人々に豫測できるはずはない。従って、この「太白星」説話は、李白の誕生に因んだ「李姓への復姓」の傳承（「指李樹而生伯陽」「指天枝以復姓」）と同様に、李白の才能や名聲が社會的に擴大されてゆく過程において創出あるいは形成された、と考えるのが妥當であろう。その意味で、ほぼ確實に史實に基づくと見られる「謫仙人」の傳承とは、説話としての成立経緯が異なる、と言えるわけである。

しかしまた、李白という名、太白という字が——少なくとも現存の史料では——李白本來のものと考えられる點から言え、④少年期の李白の非凡な資質に着目した父あるいは両親が、⑤恐らくは、その字を「太白」と定める成人儀禮の段階で正式の名を「白」と定め、太白星に因んだ意味づけを加

えることによってその大成を願った——という種類の情況は、可能性として十分ありうることを言つてよい。④は、明確な事實關係(非凡性)に基づく必然的な認識と言つてよく、⑤は推測ながら、「名白・字太白」の相關性から見て、かなり可能性の高い情況證據と言えるからである。

いずれにしてもここで大切なのは、成人後の李白が、「太白星の、地上における化身」(注(19)参照)に相應しい資質と実績を確かに世に示した、という点である。まさにその裏づけによつてこそ、「太白星」説話は、李白の超俗性・天才性・客寓性を象徴する誕生説話として、傳記論的な説得力をもちえたのだと言つてよい。「草堂集序」に言う「世稱太白之精、得之矣」の表現は、少なくとも李白の晩年には、この説話が一般化していたことを傍證するであろう。

一方、これと對應する「謫仙人」の傳承は、李白がいわば全國的な詩人として長安の詩壇に登場するに當つての、長老賀知章による作風批評(人格・詩風批評)の言辭であり、明らかに史實としての確實性を具えている。しかし、その批評内容そのものは、「謫仙——①天上界から(超俗性)、②一時的に人間界に流謫されている(客寓性)、③仙人(天才性)」と

いうイメージ構造をもつた人物像であり、それゆえに、④自由放恣な言動も許容されやすい(放縱性)——という一連の特色を、李白自身に賦與するものであった。(注(18)論文参照)。

これはまさに、「①天上なる太白星の(超俗性・天才性)、地上における假りの姿(客寓性)」を基本構造とする「太白星」説話と同質・同種の傳承と言つてよい。<sup>\*</sup>その主要な差異は、生誕時の傳承か、中央詩壇への登場時の傳承か、という年代配置の前後關係だけということになる。

\* こうした同質性の高さから言えば、「太白星」説話に、「白という名」「太白という字」を契機とし、「謫仙人」の説話を母胎として、長安出任以後に形成された、という可能性も考えられよう。

このような誕生説話と作風説話を既成の前提として考えてみると、終焉説話としての「捉月」傳承は、明らかに前二者と對應するものとして、すなわち、李白の超俗的・天才的・客寓的な基調イメージを完成・完結させるものとして、系統的に形成されていることが推測されよう。

むしろ、そうした説話形成上の意圖は、必ずしも形成者自身(單數・複數)に自覺されているわけではない。しかし、



形成者における自覺の有無・強弱とは別個の次元において、一とたび形成された説話は、それ自體の構造によって、それぞれの表出機能を發揮し得るのであり、そうした機能がきわめて弱い説話は、たとえ一旦は形成されたとしても享受史的に繼承性が乏しい、という結果になるわけである。

\* その理由は、主として、讀者が作品から期待する「當該作者の人物像」と、現に提供されている「當該説話の構造」との不整合、という點に在るであろう。例えば、『新唐書』（杜甫傳）に記す杜甫と嚴武の不仲に關する説話（杜甫が傲慢無禮だったので嚴武が殺そうとして果たさなかつた）などは、このケースに當たるものと考えられる。

「甫、……性褻躁傲誕。嘗醉登武牀、睜視曰、『嚴挺之、乃有此兒。』武亦暴猛、外若不爲忤、中銜之。一日、欲殺甫、及梓州刺史章彝、集吏於門。武將出、冠鉤于簾三。左右、白其母。奔救、得止、獨殺彝。」

今日から文學史的に通觀した場合、「捉月」説話は、實際には李白の没後百年以上を経て形成されたにも關わらず、李白の詩と人生を象徴する好ましいプラスのイメージとして、多くの讀者に讀みつがれ、多くの詩人に詠いつがれてきた。

「溺死」を不祥として語るのを避けるといふマイナス・イメ

ージは、より強力で魅力的なプラス・イメージによってほとんど拂拭されている、というのが繼承史における實態である。

ではその魅力の中核をなすものは何か。第①章でその要點を示したように、そこには、①李白詩歌の主要題材の集約化と、②「詩人李白」を構成する基調觀念の可視化、という兩次元の機能が認められるが、總合的には、兩者が補い合つて印象を鮮明にしていると見るべきであろう。すなわち、李白の超俗性・天才性・客寓性が、長江采石磯における飲酒・捉月・水死によって、輪郭鮮明に可視化されイメージ化されている、ということである。換言すれば、超俗的な客寓の天才詩人であるがゆえに、自宅における平凡な病死・衰老死は相應しくなく、萬里の長江の明月と一體化して、酒興のうちに永遠の生命を保つのだ、と考えられよう。太白星の精なる謫仙人李白は、江月の光に誘われて、遙かな天空、或いは、千尋の水中に去つたのである。「騎鯨上青天——鯨魚に騎りて青天に上る」(宋、梅堯臣「采石月、贈功甫」)や、「不作天仙作水仙——天仙と作らずして水仙と作る」(元、薩都刺「采石懷李白」)といった空想・幻想のイメージが付加され愛誦されているのは、まさにこの點を證明するものであろう。

## (五) 杜甫・李賀における終焉説話

李白における終焉説話をこのようなものとして位置づける  
とき、同様に印象的な終焉説話として、杜甫と李賀のそれが  
關心の対象となってくる。

『舊唐書』『新唐書』の「杜甫傳」に記された「牛肉白酒」<sup>(22)</sup>  
の終焉説話は、『明皇雜錄』のような小説・雜記類に基づく<sup>(23)</sup>  
とされながらも、それが實際には杜甫自身の作品に起因しつ  
つ、かつまた、唐史を代表する二つの正史に明記された傳承  
であるという點で、——享受史的には——「捉月」説話より  
も遙かに大きな信憑性をもって讀者に提示されてきたと言っ  
てよい。従つてまた、これを史實とする見かたも、今日なお  
有力な異説として併存している。<sup>(25)</sup>この點は、ほとんど史實と  
しての可能性をもたない——すなわち、純粹に享受史的な所  
産としての——「捉月」説話にくらべて、説話としての形成  
過程に或程度の差異を認めるのが妥當であらう。

乃泝沿湘流、遊衡山、寓居耒陽。甫嘗遊嶽廟、爲暴水  
所阻、旬日不得食。耒陽聶令知之、自棹舟迎甫而還。：

李白における「捉月」説話（松浦）

…昭牛肉白酒、一夕而卒於耒陽。時年五十九。

（『舊唐書』卷一九〇、下）

泝沅湘以登衡山、因客耒陽、遊嶽祠、大水遽至、涉旬  
不得食。縣令具舟迎之、乃得還。令嘗饋牛炙白酒。大  
醉、一昔卒。年五十九。  
（『新唐書』卷二〇一）

一方、李賀の終焉説話として名高い「白玉樓」の傳承は、  
一つ下の世代に屬する李商隱の「李賀小傳」（『李義山文集』卷  
四）に、李賀の姉から聞いた實話として記されるものであ  
る。従つて、傳承の經緯、自體は信憑性の高いものであるが、  
傳えられた内容は、「李賀」のイメージに相應しく幻想的で  
あり、「捉月」説話や「牛肉白酒」説話にくらべて現實性に  
乏しい。

長吉將死時、忽晝見一緋衣人、駕赤虬、持一板書、若  
太古篆、或霹靂石文者、云、「當召長吉」。長吉了不能讀。  
歛下榻叩頭、言、「阿嬰（原注）（呼母聲也）老且病、賀不願去」。  
緋衣人笑曰、「帝成白玉樓、立召君爲記。天上差樂、不  
苦也」。長吉獨泣。邊人盡見之。

少之、長吉氣絕。（常）長所居窓中、勃勃有烟氣、聞行車聲

管之聲、太夫人（母親）急止人哭。待之、如炊五斗黍許時、長吉竟死。

王氏姉、非能造作謂長吉者。實所見如此。

（李商隱「李賀小傳」、四部叢刊『李義山文集』卷四）

杜甫と李賀の終焉説話を比較した場合、第一に氣づくのは、杜甫についてはその主要な話題が「牛肉白酒死」↓「溺死」↓「舟中の病死」と時代的に變化しているのに對して、李賀については「白玉樓」説話で一貫している點である。

これはまさに、説話、とくに終焉説話というものが、その形成時における當該人物への評價やイメージを反映するものであることに、原因しているであろう。従つて、既成の終焉説話が新しい時代の評價やイメージと合致しなくなった場合には、説話自體が變形もしくは改編されてゆくわけである。

杜甫の終焉説話は、通説のごとく、杜甫自身の關連作品、すなわち、「聶耒陽、以僕阻水、書致酒肉、療饑荒江。詩得代懷、興盡本韻。至縣呈聶令、陸路去方田驛四十里、舟行一日。時屬江漲、泊於方田——聶耒陽（縣令）、僕の水に阻まざるを以つて、書もて酒肉を致し、饑を荒江に療さしむ。詩

は懷に代ふるを得、興は本韻に盡く。縣に至りて聶令に呈せんとするも、陸路は方田驛を去ること四十里、舟行は一日なり。時に江の漲るに屬し、方田に泊す」〔仇注〕卷二十三〕に基づいて、没後まもなく形成されたと考えられる。

この古體詩の詩題と本文において、杜甫は、①洪水に阻まれていた自分たちを、耒陽の聶縣令が五日がかりで捜し出し、手紙とともに酒と肉を届けて飢えを救ってくれたこと、②感謝の氣持をこの詩に表わして縣令に呈上しようとしたが、江の増水のため、方田驛に宿泊したままであることを、はっきりと記している\*。

\* 上記の詩題の他に、下記の詩句自體も直接にこの點に言及している。「耒陽馳尺素、見訪荒江渺。……知我礙湍濤、半旬獲浩漑。——耒陽（縣令）尺素（手紙）を馳せ、荒江の渺なるに訪れ見る。……私の湍濤（激流の大波）に礙けらるるを知り、半旬（五日）にして浩漑（水の廣がり）のうちに獲たり」。

ここには最晩年の杜甫の、飢えと老衰に苦しむ水郷生活が、杜甫自身の筆によって具體的に描かれており、その一連の要點が『明皇雜錄』や『舊唐書』『新唐書』の終焉説話に直接の素材を提供していることは、ほとんど疑いない。とりわけ、正史としての兩唐書が——上記のごとく——「旬日・

「酒肉飽死」を明記していることは、①その記述の重點が、杜甫自身の筆になる「療饑荒江」の記述と合致しているという點を確認させるとともに、②中唐から宋初の杜詩の讀者たちが——少なくともその大勢において——こうした杜甫像を拒否していなかったということとを、結果的に證明しているであろう。

續いて、南宋の中期ごろまでの間に、「酒肉飽死」説話を否定した「溺死」説話が、一つのまとまったストーリーとして形成される。清の仇兆鰲『杜詩詳注』に「唐人李觀」の作として引かれる『杜傳補遺』は、近年の研究<sup>(26)</sup>によって「宋人李觀」の著作であることが指摘されているが、そこには、「酒肉飽死」説話は、未陽の聶侯が玄宗を欺くために捏造した虚偽の報告であり、実際には、杜甫は大水のために溺死したのである、という別個の説話が記されている。

(A) 唐杜甫子美、詩有全才、當時一人而已。泊失意蓬走天下、由蜀往耒陽、依聶侯、不以禮遇之。子美忽忽不怡、多遊市邑村落間、以詩酒自適。

(B) 一日、過江上洲中、飲既醉、不能復歸宿酒家。是夕、江水暴漲、子美爲驚濤漂泛。其尸不知落於何處。

李白における「捉月」説話（松浦）

(C) 泊玄宗還南內、思子美、詔天下求之。聶侯乃積空土於江上曰、「子美爲白酒牛炙、脹飢而死、葬於此矣」、以此事聞玄宗。

(D) 吁、聶侯當以實對天子也。既空爲之墳、又醜以酒炙、脹飢之事。子美有清才者也。豈不知飲食多寡之分哉。詩人皆憾之。題子美之祠、皆有感歎之意。知非酒炙而死也。

(E) 高顯、宰耒陽、有詩曰「詩名天寶大、骨葬耒陽空」、雖有感、終不灼然。唐賢詩曰、「一夜耒江雨、百年工部墳」。獨韓文公詩、事全而明白。知子美之墳空土也、又非因酒而死耳。

（宋、李觀「遺補傳」『分門集註杜工部集』四部叢刊本）

前半(A)(B)(C)の三段が、説話の部分。(D)「吁、聶侯は當に實を以つて天子に對ふべき也」以下、(D)(E)の後半二段が、話者の評語である。「耒陽——聶縣令——大水」という舞臺・人物・情況は共通でありながら、ここには「牛肉白酒」は全く登場しない。耒陽の杜甫の墓は、玄宗の詔に應えるために聶令が仕組んだ「空土」だとされるのである。

杜甫の死（七七〇年）は、玄宗の死（七六二年）より八年も後である。その點だけを考えても、この説話の虚構性は明らか

かであるが、後半の一連の評語からは、當時の関係者たちの強い情熱、すなわち、「牛肉白酒死」という杜甫にとつての不面目を何とか否定・拂拭したいという強い情熱が、よく理解されよう。

結びの一段(B)で言及されている「韓文公の詩」とは、同じく南宋中期ごろの撰とされる蔡夢弼會箋『集註草堂杜工部詩、外集』(酬唱付録)、『分門集註杜工部詩』(序)、それに續く徐居仁編・黃鶴補註『集千家註分類杜工部詩』(巻頭「序碑銘」)に、韓愈の「題杜工部墳」「題子美墳」などとして收める七言古體詩<sup>(27)</sup>。李觀によって「事全而明白」と稱賛されているように、「遺補傳」の溺死説話と全く同じ内容が、同じ評價において詠いこまれている。従つて、「遺補傳」がこの詩を前提として溺死説話を記述していることは明らかであるが、この詩は韓愈の詩文集には無く、採録者の蔡夢弼自身が「此……惟載於劉斧『撫遺小説』(二十卷、逸)。……乃後之好事俗儒、託而爲之、以厚誣退之。決非退之所作也明矣」と注記している假託の作である。注(26)所掲の諸論文が考證・推定するように、恐らくは、北宋中期から南宋中期にかけて形成された「溺死」説話の一環の、主要な作例、として位置づけるのが妥當であらう。

この「溺死」説話は、それを引用・批判する仇兆鰲が、「牛酒飢死の冤を雪がんと欲して、反つて加ふるに水淹身溺の慘を以つてす」と慨嘆しているように、「飽死」の不面目を雪ごうとして、逆に「溺死」という慘事を付加してしまつた處置、とも評せよう。しかし、洪水という不慮の災害による死であるだけに、みずから招いた「酒肉飽死」に比べれば、たしかに、一步の修正とは言えるであらう。その意味で、説話形成者の意圖は、基本的には生きていくわけである。

やがて、宋—元—明—清と杜甫の評價が「詩聖」<sup>(28)</sup>として決定的に高まってゆくなかで、杜甫の死は「飽死」でも「溺死」でもなく、舟中の「病死・老衰死」であるとすると説が主流となる。むろん、清初の錢謙益のように、「牛肉白酒、何足以為垢病——牛肉白酒など、垢病(恥辱)と見なすほどのことではない」(『杜詩箋注』巻八)として、この説話を史實だと見る注釋者も存在する。しかし、注釋史の大勢としては、仇兆鰲に代表されるように、「病死」説こそが通説・定説の地位を占めるようになり、ほぼそのままの情況で現在に到っている。(近人の「病死」説としては、聞一多「少陵先生年譜會箋」(『聞一多全集』丙集)が諸説を集めて詳細である)。

特に清初の諸注釋においては、——該博精緻な『錢注杜詩』が、宋の呂汲公『杜詩年譜』<sup>(29)</sup>、同、王得臣『塵史』<sup>(30)</sup>、同、黃鶴『集千家註分類杜工部詩』<sup>(31)</sup>などの先行の「病死」説を批判して、改めて「酒肉飽死」説を復活させているだけに——『錢注』への再批判という點に大きな重點が置かれている。

例えば、黃生『杜工部詩説』(卷十一「諸體」)や、仇兆鰲『詳註』(卷二十三)に見られる一連の考證の筆致には、杜甫への不當な傳承を否定せずには已まないという執念さえ感じられて興味深い。終焉説話の形成と繼承が、傳記論的に大きな意味をもつものであることが確認されよう。

これに對して、李賀の終焉説話は、基本的に「白玉樓」の傳承で一貫している<sup>(32)</sup>。ということとは、李賀の詩と人生に對する印象や評價が、同時代から今日まで基本的に變っていないことを意味しているわけである。「白玉樓中の人」という表現が今日なお生きた比喩であることは、説話としての繼承性の強さを示しているよう。

この説話の形成要因は、むしろ、李賀の性格と、作品の個性である。前者は、「細瘦、通眉、長指爪」(「李賀小傳」)と描かれ、母親から「是兒、要當嘔出心始已爾——この兒は、

李白における「捉月」説話(松浦)

心臟を嘔き出すまで詩を作りつつけるに違いない」(同)と嘆かれたという李賀像である。後者は、その作品——特に「秋來」「神絃曲」「感諷、其三」「蘇小小墓」「南山田中行」といった主要作品を特色づけている特殊な個性、すなわち、「冥界」鬼界」的なものへの共感的描寫である。

兩者は、いわば相乘的に作用しつつ、死後の世界との交霊能力を象徴する「白玉樓」説話を、形成かつ繼承させてきたのだと言つてよい。——「緋衣の神人」「赤い叫みずち」「奇怪な古代文字」「冥宮の文人たるに相應しい李賀の文才」「空中に流れる車駕・音樂の聲」……等々。「白玉樓」説話の一切は、そのリアリティーを保證するために、白晝の、衆人體験、として語られ記されているのである。

ちなみに、かれにとって象徴的な「鬼才」という評語は、現存の史料では、没後およそ二百年、宋初の錢易『南部新書』(丙)に見えるのが早い用例とされている。

李白爲天才絶、白居易爲人才絶、李賀爲鬼才絶。

ただし、南宋の葉廷珪の『海録碎事』(卷十八「文學」(文章))には、「唐人以太白爲天才絶、白樂天人才絶、李賀鬼才絶」

とあるので、この評語の創出は、『南部新書』よりもさらに早い時期に遡る可能性もある。いずれにせよ、「鬼才」の形象構造が、「白玉樓」のそれと通底するものであることは、言うまでもない。恐らくは、李賀詩の冥界描寫や「白玉樓」説話を直接の母胎とし、より根本的には、李白の「天才・仙才」像を發想の起點として、「天・人・鬼」の三幅對の形に構成したものであろう。中間の「人才」が杜甫でなくて白居易であるところには、當時の批評史的な判斷の趨勢が表われていて興味深い。

## (六) 結語

およそ「作者」や「作品」なるものは、文學史的に見て、「讀者」\*との關係においてのみ、その地位や意味が決定される、という基本的な性格をもっている。

\* ここに言う「讀者」とは、①一般讀者、②同一ジャンルの實作者、③研究者、さらには④作者自身、をも含む「あらゆる讀み手」を意味している。

通時的に見れば、李白における「捉月」説話、杜甫における「牛肉白酒」説話、李賀における「白玉樓」説話は、中國文學史において、詩人の詩風と人生を象徴する最も著名な終

焉説話<sup>(33)</sup>に屬するもの、と言つてよい。

この觀點から三人の詩人を比較した場合、李白には——すでに見てきたごとく——生誕説話(「太白星」傳承)↓作風説話(「謫仙人」傳承)↓終焉説話(「捉月」傳承)という同質の三つの説話が、系統的に具わっている。李賀には、生誕説話に相當するものは見られないが、作風説話としては、きわめて個性的な「嘔心」傳承——心臓を吐き出すまで詩を作り續ける——が、かれの詩作態度を象徴するものとして傳えられている。それが「白玉樓」傳承と同様に、李賀の「鬼才」像を増幅する機能をもつことは、言うまでもない。

これに對して、總體的に説話性の乏しい杜甫には、生誕説話・作風説話と見なすべきものでまったくない<sup>(34)</sup>。また肝腎な終焉説話自體についても、それがあまりにも晩年の杜甫の貧窮零落ぶりを活寫するものであったために、「詩聖」杜甫への評價の高まりに應じて、次第に強い否定の情念を生み出すことになり、ついには、別個の終焉學説が解釋史(より廣くは享受史)の主流を占めることになっている。

以上の考察に明らかなように、こうした三者の終焉説話をめぐる一連の異同には、それぞれの説話の構造や機能の差異

だけでなく、三人の詩人の詩風や個性の差異が、享受史的な感覚の總和として鮮明に反映されている。この點はさらに、韓愈や白居易のような、終焉説話とは無縁な詩人との比較の問題にも、關連的に發展しうるであろう。

この意味で、著名な説話、とりわけ、著名な終焉説話には、——その史實的な眞偽はいずれであるにせよ——傳記論的に大きな可能性が含まれていると言つてよい。たんに小説家の雜記として無視・批判・否定等の對象とするだけでは、ありうべき豊かな論點が見失なわれることになるであろう。客觀的に見る限り、説話の形成・繼承に關する原因は、より多く「作者」や「作品」の性格自體に在る、と判斷されるからである。

## 〔注〕

- (1) 王瑤『李白』一〇六頁(上海人民出版社、一九五六年版)、  
詹鐸『詩白詩文繫年』一五二頁(作家出版社、一九五八年版)、  
武部利男『李白』(八)八頁(中國詩人選集、岩波書店、一九五七年版)、  
小尾郊一『飄逸詩人、李白』二五一頁(集英社、一九八二年版)、  
安旗・薛天緯『李白年譜』(齊魯書社、一九八二年版)、  
裴斐『李白的傳奇與史實』(『文學遺產』中國社會科學院文學研究所、一九九三年第三期)、等。

李白における「捉月」説話(松浦)

(2) この點は、諸本を校合した「唐摭言校勘記」(『唐摭言』上海古籍出版社、一九七八年版)によつても確認される。

(3) 王琦注本の「自序」には乾隆二十三年(一七五八)歲次庚寅正月望日」とあり、「跋」には「乾隆己卯(一七五九年)秋九月」と記されている。

(4) 筆者自身の關連著作を除いた場合、例外的に、大野實之助『李太白研究』二二頁(早稻田大學出版部、一九五九年)、岡村繁『李白の政治的自負とその本質』(『集刊東洋學』東北大學中國文史哲研究會、一九八三年十月)、羅聯添『唐代詩人軼事考辨』(『唐代文學論集』下、學生書局、一九八九年)では、この點が明記されている。

(5) ただし『茗溪漁隱叢話』(前集、卷三十七)「郭功甫」の項の冒頭に引く『王直方詩話』所引の本文では、「採」「聞」のままである。

(6) 清の曹笙南『李翰林姑媿遺迹題詠類鈔』卷六(光緒八年<一八八二>)當塗縣南寺巷集文堂聚珍本)。ここでは『李白與當塗』一〇二頁(馬鞍山市當塗縣地方誌辦公室、一九八七年)所引の本文に據る。

(7) 清、厲鶚『宋詩紀事』(卷二十七)「郭祥正」小傳)。

(8) 「郭祥正、字功父、太平州當塗人。母夢李白而生、少有詩聲。梅堯臣、方壘名一時、見而歎曰、『天才如此、眞太白後身也』(『宋史』卷四四四「文苑傳」郭祥正)。また、『宋詩紀事』(卷二十一「梅堯臣」所引「采石月下贈功甫」付注)も參



照。

- (9) 注(5) 所引『王直方詩話』 参照。
- (10) 「騎鯨」傳承の早い用例としては、晩唐の貫休の「宜哉杜工部、不錯道騎鯨」(『觀李翰林真、其一』、『全唐詩』卷八二九)であること、またその傳承は杜甫の「送孔巢父謝病歸遊江東、兼呈李白」(仇注卷一)の最終第二句「南尋禹穴見李白」の異文「若逢李白騎鯨魚」に基づくものらしいこと、については、注(1) 所掲裴斐論文に指摘がある。
- (11) この點については、松浦友久「韓愈の『伯夷頌』をめぐる二三の問題——伯夷説話の形成と繼承」(『東洋文學研究』第十七號、早稻田大學東洋文學會、一九六九年三月)で具體的に論じている。
- (12) 参照：「死而不弔者三、畏(①犯法獄死、②非罪而死、③兵刃所殺)・厭(死於巖墻下)・溺」(『禮記』檀弓、上)。
- (13) 杜甫の溺死説については、本稿第五十章参照。なお、『千一錄』については、瞿蛻園・朱金城『李白詩校注』(下)「叢説」に、「方弘靜、千一錄」として別話を引用する。方氏については、『内閣文庫漢籍分類目録』等に「素園存稿、二〇卷、明、方弘靜」と記す明の方弘靜のことかと思われるが、該書未見。請指教。
- (14) 郭啓宏「李白之死的考證」(『光明日報』一九九一年九月七日)。
- (15) この點については、早い時点で私見の要點を指摘している。
- (16) 参照：村上哲見「杜甫の酒歴とその詩」(吉川幸次郎注『杜甫、II』月報(筑摩書房、一九七二年八月))
- (17) 参照：吉川幸次郎「杜甫と飲酒」(『吉川幸次郎全集』卷十二、筑摩書房、一九六八年)。
- (18) 参照：「李白における長安體驗——『謫仙』の呼稱を中心に」(H)(『中國文學研究』第九・十期、早稻田大學中國文學會、一九八三年十二月・一九八四年十二月)。
- (19) このことは、晩唐の孟榮『本事詩』(『高逸』第三)で賀知章から「謫仙人」と稱賛された肝腎な評語が、例えば五代の王定保『唐摭言』(卷七「知己」)では、「李太白、始自西蜀至京。名未甚振。因以所業贊謁賀知章。知章覽蜀道難一篇、揚眉謂之曰、『公非人世之人、可不是太白、星精耶』」と記されて「太白星の精」のイメージに變ってしまっていることから、或程度の確信性をもって推測できよう。
- また、晩唐の裴敬「翰林學士李公墓碑」(武宗、會昌三年、八四三)に、「或曰、太白之精、下降、故字太白。故賀監號爲謫仙、不其然乎」とあるのは、「太白之精」説話を前提として「謫仙」評が生まれた、とする立場である。が、これは、兩説話が並存していた晩唐の段階で、李陽冰「序」や范傳正「碑」の記述をそのまま繼承したものであろう。肝腎な點

は、「太白精下降」と「謫仙」とが同質の話題(天才性・超俗性の來源)として語られている、というところにある。

- (20) 具体的な作例は、王注本卷三十二・三十三「詩文」、あるいは、注(6)所掲「李白在當塗」三「歷代名人詠懷李白在當塗遺迹」等に、數多く收められている。

- (21) 「采石懷李白」(四部叢刊本『陸天錫詩集』後集、七言律詩)。

- (22) 『明皇雜錄』曰：杜甫後深寓湘潭間。羈旅鷓鴣於衡州未陽縣。頗爲令長所厭。甫投詩於宰。宰遂致牛炙白酒、以甫遣。

甫飲過多、一夕而卒。集中猶有「贈聶未陽詩」也(『太平御覽』卷八六三「炙」所引)。

- (23) この點は、例えば清初の黃生『杜工部詩說』(卷十一「諸體」)等、關連文獻の通説と言つてよい。

- (24) 後述の「聶未陽、以僕阻水、書致酒肉……」(仇注卷二十三)。この點も、『杜工部詩說』を始め關連諸論の通説と言つてよい。

- (25) 例えば、錢謙益『杜詩箋注』(卷八)、金啓華『杜甫詩論叢』(上海古籍出版社、一九八五年)。また、狹義の學術書とは言いがたいが、郭沫若『李白與杜甫』(人民文學出版社、一九七一年)もこの立場である。

- (26) 胡傳安「兩唐書杜甫傳補正」(『大陸雜誌』第三十卷第一期、一九六五年)、黑川洋一「『唐書』杜甫傳中の傳説について」(『杜甫の研究』創文社、一九七七年)、陳文華『杜甫傳記唐宋資料考辨』第三篇(文史哲出版社、一九八七年)

李白における「捉月」説話(松浦)

等には、『杜傳補遺』が、南宋中期の成立とされる『分門集註杜工部集』の「序」に「皇宋李觀撰」として收める「遺傳」に他ならないことが、指摘されている。

- (27) この詩は、仇注本付録「諸家詠杜」にも、「見分類千家注本」と注記し「杜子美墳」と題して、全文を収録している。

- (28) 杜甫の「詩聖」の呼稱が、實は李白の「謫仙・詩仙」の呼稱を前提として、それとの對應において漸次形成されたものであること、またその文學史的意義については、注(18)所掲論文(下)の第(十)章においてやや詳しく論じた。

- (29) 「呂汲公年譜云：大曆五年辛亥、是年夏、還襄漢、卒於岳陽」(四部叢刊本『分門集註杜工部詩』卷頭諸年譜「嘉興魯嘗撰、年譜」〔大曆五年〕)。

- (30) 「子美北還之迹、見此三篇」(「回權」「登舟將適漢陽」「暮秋將歸秦、留別湖南幕府親友」を指す)。安得卒於未陽耶。要其卒、當在潭岳之間、秋冬之際(知不足齋叢書第三十集、王得臣『麈史』卷中「辨誤」)。

- (31) 「鶴曰、……今以詩考之、公是秋下洞庭、欲歸襄陽、尙有『別湖南幕府親友』及『過洞庭湖』詩。其誣不足攻也」(黃鶴『集千家註分類杜工部詩』(卷三十七))。

- (32) むろん、或程度のバリエーションは認められる。「及賀卒、夫人(母親)哀不自解。一夕夢賀來、如平生時。……夫人訊其事。賀曰、『上帝神仙之居也。近者遷都于月圃。構新宮、命曰白瑤。以某榮於詞、故召某與文士數輩、共爲新

宮記。帝又作凝虛殿、使某輩纂樂章。今爲神仙中人、甚樂。願夫人無以爲念。既而告去、夫人寤。甚異其夢、自是哀少解」(出『宣室志』、『太平廣記』卷四十九「神仙」)。これはいわば、「白玉樓」説話ならぬ「白瑤宮」説話であるが、傳承譚としての本質は全く共通している。

(33) これらと同等の象徴性を持ち、かつ、終焉説話の系譜において更に源泉的な地位に在るものとしては、屈原の「懷石自沈」の説話(『史記』卷八十四「屈賈列傳」)が指摘されるべきであろう。中國文學史における終焉説話の系譜とその論點については、稿を改めて論じたい。

(34) 「爲人性僻耽佳句、語不驚人死不休」(「江上值水如海勢、聊短述」仇注卷十、「晚節漸於詩律細」(「遺悶、戲呈路十九曹長」仇注卷十八)等は、性格や詩風への自己描寫の言辭であり、第三者による傳承譚としての作風説話、と見なすことはできない。

(35) 具體的に言えば、史實に基づく場合には、そうした説話化されやすい個性・作風の詩人だったという點で、また、虚構の場合には、そうした説話的虚構が假託されやすい個性・作風の詩人だったという點で、それぞれに意味をもつわけである。